国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the use of the adverbial modifier 'hodo'-phrase

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井本, 亮, IMOTO, Ryo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002041

『日本語科学』8（2000年10月）7-28　〔研究論文〕

連用修飾成分「ほど」句の用法について

井本　亮
（筑波大学大学院）

キーワード

「ほど」，程度副詞，数量詞，限界性，計算的解釈

要旨

従来，「ほど」は補部を取って程度副詞句の主要部となる形式副詞であるとされてきた。しかし，「ほど」が構成する「～ほど」という形式（以下「ほど」句と呼ぶ）には他の用法があり，必ずしも程度副詞的な用法だけでなく，事物・事象回数・動作量を表す数量詞的な用法も認められる。本稿では，「ほど」句の用法について考察し，「ほど」句が程度用法にとどまらない諸用法を持つことを指摘する。そして，「ほど」句が数量詞的な性質を備えることを形式名詞や述語動詞の項構造の観点などから示す。そして数量詞的性質を仮定することによって，「ほど」句の解釈原理が説明できることを主張する。事物数量用法の他にも，動作量用法は非限界的事象を計量する期間数量詞，事象回数用法は多回化された限界的事象の個別的計量機能に対応する。本稿の結論は，「ほど」句の解釈が述語動詞の性質等から計算的に決定されるものであることを指摘すると同時に，連用修飾成分研究の方向性を示唆するものである。

0．はじめに

「ほど」については，従来の研究では副助詞（山田1936, 田中1977, 丹羽1992[1]など），副詞的吸着語（佐久間1956），数量詞に後続して［概括］の意義を与える語（仁田1981）などのように，付属語という視点で論じられてきた。一方，奥津（1975, 1980, 1986）では，非自立的ながらも主要部として副詞句を構成するものとして，形式副詞という位置付けが与えられた[2]。

（1）太郎は 死ぬほど／非常に／*死ぬ／*ほど 疲れた　（奥津1986：33）

奥津の形式副詞という考え方は，従来の便宜的でもあった副助詞という立場から副詞的機能を持つものを抽出し，積極的に認めたものといえる。そして，その用法から「ほど」は程度の形式副詞と位置付けられた。「ほど」は補部を伴うことによって，ひとつの連用修飾成分[3]として機能する。本稿では以下，「ほど」が構成する連用修飾成分を「「ほど」句」と呼ぶこととする[4]。

しかし，この「ほど」句は，一律に程度副詞として扱えるほど単純な用法だけを持つものではない。次の例はどちらも程度性を修飾しているとは考えにくい。

（2）a．箒で掃きすてるほど男がいる。（放浪記）（下線は引用者。以下同様）

b．飽き飽きするほど言わされましたね。いまさら馬鹿みたいなセリフですが，ここでもう一度繰り返しておきましょう。(錦繡)

(2a) では，「箒で掃きすてるほど」は主語位置名詞句「男」にかかり，それが不特定多数であることを，(2b) では「飽き飽きするほど」は主文にかかり，主文が表す事象 (event) の回数が多回的であると解釈される。これらはそれぞれ，不定数量詞および頻度副詞として捉えられるものであり，程度副詞の派生用法とは考えにくい。さらにいえば，これら「ほど」句が構成する副詞句の修飾する概念は，自立副詞のように語彙的に指定されているわけではなく，それがかかる要素に依存するものであると考えられる。つまり，どのような要素にかかるかによってその修飾概念が異なるのである。次の例では，「ほど」句「死ぬほど」は程度概念 (3a)，目的語名詞句の数量概念 (3b)，動詞句の表す動作の量 (時間) 概念 (3c) を修飾している。

(3) a．死ぬほど疲れた。
b．死ぬほど酒を飲んだ。
c．死ぬほど働いた。

こうして観察してみると，「ほど」句に程度副詞相当の機能を認めるというだけでは不十分であると考えられる。つまり，「ほど」句がどのような概念を修飾するかについては，「ほど」の意味範疇からだけでは決定できないということであり，この点で奥津(1983)がいう「一形式副詞一範疇」という特徴は「ほど」の用法の記述としては妥当ではないと思われる。「ほど」はどのような副詞なのか——「何副詞」なのか——という議論の前に，連用修飾成分としての「ほど」句がどのような環境でどのような修飾機能を持つかについて考察することが肝要であると思われる。

そこで本稿では，連用修飾成分「ほど」句の用法を考察し，程度概念修飾以外の「ほど」句の用法と機能を明らかにする。本稿の目的は，第一に「ほど」句の多様な用法を例示し，「ほど」句の修飾機能が程度概念修飾にとどまらないことを指摘すること，第二に，その各用法を主に数量詞的性質という観点から説明することである。ならびに本稿の考察は，副詞的成分の意味解釈を述部の意味概念との関係性から捉えるという接近法を示唆するものである。

本稿では，議論の単純化から，主文述部に動詞句が現れるものを考察の対象とする。同様の理由で，「ほど」の補部が節[5]であるものを対象とする。形容詞述語文[6]や否定形式をとる述語文，および「山ほど」「あれほど」のような，補部に名詞句または指示代名詞を含む句は考察対象から除外する。用法としては奥津(1980)が「「非常」の程度」と呼んだ，程度述語の示す程度が非常であることを表す用法に限って考察する[7]。なお，本稿では「程度副詞」という術語を，奥津に従い，山田(1936)に始まるいわゆる「副詞の3分類」のひとつとしてではなく，修飾対象が持つ程度性を修飾する狭義の典型的な程度副詞を指すものとして使用する。よって，程度概念は数量的概念を内包しないものとする。したがって，本稿での「程度副詞」は森山(1985)の分類における「純粋程度副詞」に相当し，広義の程度副詞を指す際には「一般程度副詞」と呼ぶことにする。

本稿は以下のような構成をとる。１節では，「ほど」句の用法を，実例をもとに確認する。２節では「ほど」句と一般程度副詞の相違点について考察する。３節では数量詞的性質という視点を動機づける形式名詞の「ほど」と数量詞との関係を概観する。４，５節では数量詞の性質を援用して「ほど」句の用法と機能の対応関係を考察する。６節は結論と今後の課題である。

１．「ほど」句の用法

本節では，「ほど」句が実際にどのような修飾成分として解釈されるかを，実例をもとに観察する。

1.1. 程度用法

奥津が指摘したように，形式副詞「ほど」によって構成された副詞句（＝「ほど」句）は程度副詞と同様に機能する。つまり，次例に示すように程度述語にかかってその程度を修飾する。

（４）ａ．今までにそんなことは覚えのないほど疲れていた。（黒い雨）
　　ｂ．海戦となると，ジェノヴァやヴェネツィアの海洋国家勢が，経験からしても能力からしても，トルコなど問題にならないほどすぐれていた。（陥落）
　　ｃ．男は痩せて四十五，六，女は男の倍もあるかとみえるほど肥えて，としも男より五つ六つは上だろう。（さぶ）

（４）の各例では，「ほど」句は自立的な程度副詞「非常に」「はなはだ」などと置換可能である。このとき「ほど」句は程度性を含意する程度述語を修飾し，その程度が著しいことを意味する。また，「中川は非常に速く走った」や「その写真はとても綺麗に写っている」のように，副詞を修飾する用法もあり，これも程度副詞相当の用法と考えられる[8]。

（５）ａ．薬湯の効果は於継のときとは較べものにならないほど早く現われた。（華岡）
　　ｂ．血の滲むほど強く唇をかみしめながら信夫は思った。（塩狩）
　　ｃ．部下の夫人たちにでも，どうかすると誤解を受けはしまいかと思われるほどよく気を使って，外国へ行けば香水やコティの白粉や口紅を土産に買って来る。（五十六）

(5a-c) はそれぞれ「早く」「強く」「よく」といった副詞成分が表す情態概念を修飾し，それが著しいことを表しているという点で，これらの「ほど」句は程度副詞的であると考えられるが，語彙的な一般程度副詞とはいささか異なる現象も見せる。それは「ほど」句の位置である。

（６）ａ．{持ちきれないほど／とても}たくさん本を買った。
　　ｂ．たくさん{持ちきれないほど／*とても}本を買った[9]。
　　ｃ．{持ちきれないほど／*とても}本をたくさん買った。

(6a) のように，「ほど」句は程度副詞「とても」と置換可能である。しかし，同時に，「ほど」句は名詞句「本」に直接かかり「持ちきれないほどの本」とも解釈できる。さらに，先行詞である「たくさん」との語順を変えると，それぞれのふるまいが異なる。まず，(6b) のように，「たくさん」がそれを修飾する副詞よりも前置されるとき，「ほど」句は文法的であるが「とても」は非文になる。また，先行詞とそれを修飾する副詞句との分離に関して，「ほど」句は先行詞と分離して現れることができるが，自立副詞「とても」では非文になる (6c)。このような現象を観察すると，「ほど」句の程度用法が本来的なものであるかどうかが問題となるが，いずれにせよ，「ほど」句に程度用法があることは確かであり，本稿では主要な考察対象としていない形容詞述語文などを観察すると，より多くの例が確認できるであろう。

1.2. 事象回数用法

次は，意味的には「何度も」や「繰り返し」といった反復を表す副詞句と置き換えられる，事象回数用法である。このとき，文が表す事象の回数が著しく多いという解釈になる。

(7) a．その当座，重松は日課と云っていいほどコブツを見に出かけていたが，小鳥が捕れていたことは一度もなかった。(黒い雨)

b．手習いをするのにうまい字を書こうと思うな，と芳古堂の親方が諄いほど云った。(さぶ)

c．暗記するほど読んだこの手紙を，ふじ子は信夫の逝った地点で読みたいと思って，持って来たのだった。(塩狩)

事象回数用法の特徴は，特定の述語や名詞句ではなく，動詞句を中心として表される事象の回数性を含意する点である。(7a) では「コブツを見に出かけた」，(7b) では「～と芳古堂の親方が云った」，(7c) では「(この手紙を) 読んだ」が一回の事象であり，それぞれの「ほど」句は，その全体にかかって，連続的・反復的事象を意味することになる。

1.3. 事物数量用法

次は，事物数量用法である。このときの「ほど」句は，統語的には連用修飾成分であるが，意味的には特定の名詞句が表わす事物の数量を修飾する解釈になるので，本稿ではこのように呼ぶことにする[10]。このときの名詞句は主に主語位置名詞句または目的語位置名詞句であり，どちらの名詞句を指示するかは，述語動詞の項構造と関係がある (4.2節で後述)。したがって，事物数量用法をさらに［主語指向タイプ］と［目的語指向タイプ］とに区別することにする。

(8) ［主語指向タイプ］

a．その死体の山を真黒に見せるほど蝿が群がって，……(黒い雨)

b．傘の表面には，指で字が書けるほど，砂がつもっていた。(砂の女)

c．やっと追返して自分の机に戻ってみると，処置に困るほど書類の山が出来上っている。（五十六）

(9)［目的語指向タイプ］

a．「おじさんに金持ちがいて，使い切れないほど小遣いをくれるんだよ」（太郎）

b．山本が「ケツから煙が出るほど」煙草を「喫んでやる」時は，とうとう来ないで終った。（五十六）

c．このビルマの国では，坊主になってさえいれば食うにはこまらない。信心ぶかい人たちがあまるほどお布施をくれる。（ビルマ）

この用法については，連用修飾成分である「ほど」句がどのような原理によって特定の名詞句を指示することになるのかが考察の焦点となるだろう。

1.4. 動作量用法

ここでいう動作量用法とは，述語動詞句にかかってその動作量を表す用法を指す。このときの「ほど」句は，述語動詞句によって表される単位動作に関わる時間，および動詞句の概念的意味が移動を含意するときには移動距離が著しく長いことを表す。

(10) a．十一のとしからまる十八年，新田を拓いてからでも十二年，わしはおふくろと二人の弟とで，腰の骨の折れるほど働いてきた，わしは嫁さえ貰わなかった，……（さぶ）

b．食慾を失うほど歩いたということは，体力のぎりぎりまで使ったということだった。（孤高）

c．足がもつれるほど走りつづけて，ようやく岬の家なみを見たときには，松江のひざはがくがくふるえ，かたと口とで息をしていた。（二十四）

２節でとりあげるが，一般程度副詞のなかにも動作の量を修飾する用法があることはよく知られている。このときの「ほど」句も一般程度副詞の数量用法と考えてよいのかどうか検討する必要があるだろう。

1.5. 様態用法

最後に様態副詞に置き換えられる用法についてふれておく。

(11) a．やっと，それを出してそろえたら，彼女は口をきゅっと「へ」の字に曲げて，にらむような目つきをしたと思うと，ひよりのあと歯で，いやというほど，土間のたたきをけって，出て行ってしまった。（路傍）

b．そしていきなり虎雄のほおをいやというほど殴りつけた。（塩狩）

c．血のめぐりの悪いくせに怒ってんのよ。このあいだお座敷に来て，いやと言うほどつねるのよ（点）

ここで注意したいのは，このときの「ほど」句の意味解釈は，動作の様態的側面の中でも動きの強さ・激しさを表す副詞，例えば「強く」「激しく」などに相当するということである。そしてこのときの述語動詞は「蹴る」「殴りつける」「つねる」のような接触衝撃動詞など一部動詞クラス[11]に限られる。また，こうした動詞クラスと共起したときの「ほど」句は，相補的に事象回数用法とも解釈される傾向がある。国立国語研究所(1972)によれば，「叩く」「殴る」などがあらわす動作の回数性は二義的であるから(：309)，一回の動作か，繰り返しの動作かは動詞の語彙的意味によっているといえる。いずれにせよ，共起する動詞クラスが限られていることからみても，この用法は動詞の語彙概念的意味に関係していると考えられるが，その考察は本稿の議論からは外れるため，ここでは用法を指摘するにとどめ，今後の課題としたい[12]。

以上のように，「ほど」句の意味解釈を観察すると，程度副詞として捉えられてきた形式副詞の「ほど」を主要部として構成される「ほど」句には，程度用法・事象回数用法・事物数量用法（主語指向タイプ／目的語指向タイプ）・動作量用法・様態用法という５種類の用法が確認できる。このうち，程度概念を修飾しているのは程度用法だけであり，事象回数を表す事象回数用法を含め，４種類がなんらかの数量概念を修飾する用法といえる。そこで，「ほど」句を程度副詞と同列に扱うことの是非について，一般程度副詞との比較から検討することにする。

2．「ほど」句と一般程度副詞との比較

奥津は「(前略)，「とても」は「疲れた」にかかる程度副詞である。「死ぬほど」も同様に「疲れた」にかかって，非常に疲れたことを意味する程度副詞である(1980：149)」と述べている[13]。「ほど」句の程度用法は「非常に，大変，はなはだ，極めて」といった語彙的程度副詞と並行的であり，これが奥津(1980)が「ほど」の用法のひとつを「非常の程度」に属するとした理由である。意味的には，「非常の程度」を表す副詞群は森山(1985)の分類における「純粋程度副詞」，佐野(1998)の分類における「「非常に」類」に概ね相当する。以下では，このふたつの観点からみた「ほど」句と一般程度副詞とを比較検討することにする。

2.1．量を表す程度副詞との比較

森山(1985)は量性の観点から，「量的概念を内包せず，純粋に程度だけを表す程度副詞(：61)」を「純粋程度副詞」と呼び，量的概念を修飾する「量的程度副詞」と区別した。たとえば，存在量叙述構文では，純粋程度副詞は共起できないが，それに対立する量的程度副詞は可能である。

(12) a．*金が大変／非常に／ある　　(森山1985：61(6))
　　 b．　金がかなり／随分／ある　　(：61(7))

「大変，非常に」は純粋程度副詞に，「かなり，随分」などは量的程度副詞に分類されている。同様の例として，動詞が程度性を含意するかどうかも適格性の差に関係している。

(13) a． 非常に怒った／痛んだ／太った　　(：62(10))
　　b．*非常に／働いた／送った／吹いた　　(：62(11))

また，語彙的な使役構造を含んだ動詞と純粋程度副詞が共起しにくいことも指摘されている。

(14) a． 範囲が極めて広がっている　　(：62(15))
　　b．*範囲を極めて広げている　　(：62(16))

このように，純粋程度副詞と量的程度副詞とは，動詞との共起関係に関して，大きな違いが見られるが，重要なことは，森山がこの分類と副詞の意味との間に傾向性がみられると示唆していることである。ふたつの副詞群のリストとともに引用する。

(15) ＜純粋程度副詞＞
非常に，大変，はなはだ，著しく，極めて，ごく，すこぶる，あまりに／ずっと，より，もっとも，一番，
＜量的程度副詞＞
かなり，ずいぶん，結構，やたら，なかなか，比較的，相当，大分，わりあい，少し，ちょっと，多少，少々，ある程度，いささか／もっと，
意味的な傾向から見れば，量的程度副詞に対して，純粋程度副詞は，その程度が極端なことをあらわすものが多いようであるが，程度の極限を示すものが，より程度副詞として純粋化してきているということなのであろうか。　　(：60)

前述したように，「ほど」句がもたらす意味解釈は，意味的には純粋程度副詞に属するといってもいい。にもかかわらず，「ほど」句は純粋程度副詞が共起しにくい動詞とも共起する。そして，その時には，純粋な程度性だけではなく，名詞句が表すモノの数量や事象の回数などを表す。

(16) a．金があふれるほどある　　[主語位置名詞句の数量]
　　b．病気になるほど働く　　[動作量]
　　c．(手紙を) 切手代が家計を圧迫するほど送る　　[目的語位置名詞句の数量]
　　d．トランペットを唇が腫れるほど吹く　　[動作量／事象回数]
　　e．新聞を隣の人が迷惑するほど広げている[14]　　[目的語位置名詞句の状態の程度]

このような事例を観察すると，「ほど」句の用法がはたして一般程度副詞の派生的用法に収まり

うるものかは疑問である。森山は「程度副詞」の属性は未分化であり，その解釈は動詞の意味・格成分の名詞句の数量性・動作のアスペクト的時間性に依存すると指摘している。これは卓見であるといえるが，それならば存在量や動作量を表す量的程度副詞を一般程度副詞の一分類と捉えなければならない根拠は，既存の副詞分類上の理由以外はないように思われるし，「ほど」句に関して言えば，その用法の多様性をみるかぎり，一般程度副詞に相当する程度用法を第一義とするよりは，それも用法のひとつであると考えたほうがよいのではないかと思われる。

2.2. 主体変化動詞と共起する程度副詞との比較

佐野（1998）は，主体変化動詞の表すアスペクチュアリティーとの共起関係から，一般程度副詞を分類している。

(17) a．{だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても}日が暮れた。
　　b．氷が{だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても}溶けた。
　　c．風邪が{だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても}治った。
（佐野1998：7(1)—(3)）

(17) にみられるように，同じ主体変化動詞であっても，すべての一般程度副詞が共起できるわけではない。佐野はこうした現象を，主体変化動詞の［±進展的変化］と［±限界性］という素性から，一般程度副詞の共起性は動詞の表す変化の仕方に依存すると指摘した。そして共起性の違いから一般程度副詞を「「だいぶ」類」「「非常に」類」に分類した。「だいぶ」類は進展性を持つ主体変化動詞すべてと共起する副詞群，「非常に」類は進展性を持ち，その進展的変化に限界のないものとのみ共起する副詞群である。

(18)「だいぶ」類：だいぶ，かなり，少し，多少，ちょっと，やや，いささか，ずいぶん
　　「非常に」類：非常に，とても，はなはだ，すこぶる，極めて，たいへん，なかなか，ばかに，やけに，けっこう，割合　　（：12）

佐野による一般程度副詞の分類における各副詞群は，意味的には森山の二分類（純粋／量的程度副詞）とほぼ重なる[15]。佐野の議論は主体変化動詞との共起性の考察に留まっているが，ここでも一般程度副詞の共起制限と意味との間になんらかの相関関係が窺える。そして，「ほど」句を一般程度副詞のひとつとして扱うならば，これは「非常に」類に属すると考えられる。

しかし，「ほど」句は「非常に」類と共起しにくい動詞クラスとも共起する場合がある。まず，［－進展的変化］の素性を持つ動詞句と「非常に」類は共起しない。しかし，「ほど」句は容易に共起する。そして，このときの「ほど」句は数量解釈（19）あるいは動作量解釈（20）となる。

(19) a．*人が{非常に／とても}死んだ。　　（：11(17)）

b．　あの戦争では，目を覆いたくなるほど人が死んだ。

(20)　a．*{非常に／とても}寝た。　　（：11(18)）
　　b．　午前か午後かわからなくなるほど寝た。

また，佐野が挙げた［＋限界／進展的変化］を含意する動詞のなかにも「ほど」句と共起できるものがある。次例（21）における「ほど」句は，限界的変化を経た後の状態の程度性を修飾していると考えられる。

(21)　a．それで釘が打てるほどバナナが凍った。
　　b．自動車が通れるほど土塀が崩れた。
　　c．どんなに激しい運動をしても問題がないほど傷がふさがった。

このように，一般程度副詞と動詞との共起関係を検討してみると，「ほど」句のふるまいは森山の純粋程度副詞や佐野の「非常に」類とは異なっていることがわかる。とはいえ，本稿の議論の焦点は，副詞の分類に関する問題にはない。むしろ重視すべきなのは，「ほど」句は純粋程度副詞や「非常に」類が共起しにくい動詞句とも共起し，その結果としていくつかの意味解釈を得るという点である。「ほど」句の諸用法の考察には述部やその他の要素との相互作用という観点が重要であると思われる[16]。

ここまでの観察から，「ほど」句の用法は文中の要素（主に述部）の意味との相関関係から整合的に得られる意味解釈のひとつであることが予測される。程度用法について言えば，程度性を含意する要素にかかり，その程度性を修飾するときに「ほど」句は程度用法として解釈されるのだと考えられる。その根拠は，第一に，「ほど」句の意味解釈には程度用法以外の用法が見られること，第二に本節で考察してきたように，「ほど」句と純粋程度副詞との違いが大きいことである。

次節からは，視点を変え，形式名詞の「ほど」をとりあげ，その数量詞的性質と「ほど」句との関連性を考えてみたい。

3．「ほど」と数量詞との関連性――形式名詞「ほど」

奥津(1986)は，数量詞に後続する形式名詞の「ほど」は概算的数量を表す句の主要部であるとしている[17]。その理由は，第一に，いわゆる数量詞遊離[18]がみられることである。

(22)　a．学生５人ほどがそこにいる。
　　b．５人ほどの学生がそこにいる。
　　c．学生が５人ほどそこにいる
　　d．学生は５人ほどがそこにいる。

（奥津1986：54(2)）

第二に，次の（23）のような例において，「ほど」の先行成分が数量詞（Numeral Quantifier）でなくても，間接的な数量表現となりうる。そしてこれも遊離することができる（24）[19]。

(23) a．親指の頭ほどのコールドクリームをとって……。
b．地球をふたつ並べたほどの距離
c．一家４人で食べられるほどの米
（：54(3-2)，55(5)）

(24) a．コールドクリーム親指の頭ほどをとって。
b．親指の頭ほどのコールドクリームをとって。
c．コールドクリームを親指の頭ほどとって。
d．コールドクリームは親指の頭ほどをとって。
（：54(3)）

第三に，間接的数量表現のとき，補部は「ほど」がなければ現れることができない。

(25) a．*コールドクリーム親指の頭をとって……。
b．*親指の頭のコールドクリームをとって……。
c．*コールドクリームを親指の頭とって……。
d．*コールドクリームは親指の頭をとって……。
（：54(4)）

以上の現象から，「数量詞＋「ほど」」および補部を伴う形式名詞「ほど」は数量詞相当の機能をもつ。また（25）からもわかるように，このときの数量詞句の主要部は「ほど」であると考えられることになるだろう。句の主要部としての機能は形式副詞のそれと同様である。とすれば，品詞論的にはどうあれ，形式名詞「ほど」と「ほど」句は，きわめて近接した機能を持つと考えられ，それによって，形式名詞「ほど」と「ほど」句の並行性がより明確になるだろう。したがって，「ほど」句にも数量詞的な性質が備わっていることが予測される。

4．「ほど」句の意味解釈と数量詞の解釈原理

4.1．「ほど」句と「ほどの」

前節では，形式名詞との横断性から「ほど」句の数量詞的性質を予測した。本節以降，その論証を進めていく。

「ほど」句の用法はその形態的特徴や補部の内容だけでは判断しにくく，主に意味解釈から捉えられる。それが一般的な程度副詞や数量詞と異なる点である。しかし，より明示的な方法でその用法を区別することができるテストがある。それは，次例（26）—（29）のように，[「ほど」→「ほ

どの」］という変換によって連体修飾成分であることを形態的に明示させるテストである。

(26) a．処置に困るほど書類の山が出来上っている。　　(＝(8c))
　　b．処置に困るほどの書類の山が出来上っている。

(27) a．使い切れないほど小遣いをくれるんだよ　　(＝(9a))
　　b．使い切れないほどの小遣いをくれるんだよ

(28) a．　二階堂はヘトヘトになるほどグラウンドを走った。
　　b．*二階堂はヘトヘトになるほどのグラウンドを走った。

(29) a．　清原は手が赤くなるほど壁を叩いた。
　　b．*清原は手が赤くなるほどの壁を叩いた。

(26) (27) はどちらも［「ほど」→「ほどの」］変換が可能である。よって，これらの「ほど」句は特定の名詞句を修飾する用法，すなわち事物数量用法であることがわかる。一方，(28) (29) はこの変換テストにより排除される。つまり，これらの「ほど」句は名詞句を指示するのではなく，文が表す事象あるいは述語動詞句が表わす動作を指示するものであることがわかるのである。それが事象回数用法および動作量用法である。

このような［「ほど」→「ほどの」］変換テストからわかることは次の二点である。第一に，「の」の承接は「ほど」句の修飾対象を明示する。つまり事物数量用法の「ほど」句と「ほどの」は，意味的に見る限りは，どちらも名詞句を修飾対象としている。これは遊離した数量詞と同様である[20]。第二に，［「ほど」→「ほどの」］という変換テストによって，「ほど」句の用法を弁別することができる。事象回数用法や動作量用法の「ほど」句は直後に名詞句があってもそれを特定的に修飾するわけではない。これらは主文が表わす事象や述語動詞が表わす動作量を修飾対象とするのであり，そのことは，現象的には「の」の承接が不可能であることによって明らかになる。

こうした点から，1.1節の (6c) のような事例を説明することができる。

(30) {持ちきれないほど／*とても}本をたくさん買った。　　(＝(6c))

一般程度副詞が述語以外の文中の成分を修飾するときには先行詞の直前に置かれなければならない(野田1984)。したがって一般程度副詞「とても」は先行詞「たくさん」から遊離することはできないが，「ほど」句は可能である。このとき「持ちきれないほどの本をたくさん買った」が可能であることから，このときの「ほど」句は事物数量用法（目的語指向タイプ）であると考えられる。これにより，「ほど」句が「たくさん」と離れた位置にあることが説明できる。すなわち，これは連用修飾成分「たくさん」にかかる程度副詞ではなく，「本」の数量を表わす数量詞として機能す

るため，副詞に関する語順的制約を受けないのである[21]。

このように，数量詞的な性質のうち，事物数量修飾か事象回数／動作量修飾かという違いは，「の」の承接可能性から判断することができる。また，「ほど」句の数量詞的性質を仮定すると，形式名詞「ほど」との横断性や一般程度副詞とのふるまいの違いを説明することができる。

4.2. 事物数量用法と動詞の項構造との関連性

1.3節で指摘したように，事物数量用法には主語位置名詞句の数量を表すタイプと，目的語位置名詞句の数量を表すタイプがあった。この指向性の違いはどこに起因するのであろうか。

影山(1993)は，いわゆる非対格性の仮説の傍証として，不定数量詞「たくさん」の計量対象の解釈を挙げている。影山は次の（31）に挙げたように，「「たくさん」＋動詞」というパターンにおいて，何がたくさんであると解釈されるかは動詞の項構造によって決まると指摘した。

(31) a．他動詞
たくさん飲んだ＝飲んだ量がたくさん
たくさん読んだ＝読んだ量がたくさん
b．非対格自動詞
たくさん産まれた＝産まれた子供がたくさん
たくさん亡くなった＝亡くなった人がたくさん
c．非能格自動詞
たくさん遊んだ＝遊んだ量がたくさん
たくさん歩いた＝歩いた量がたくさん

（影山1993:54(21)より）

このテストは数量詞の解釈を直接的に論証するものではないが，興味深いことに，「ほど」句の解釈も「たくさん」と同様の傾向を見せる。

(32) a．他動詞
まっすぐ歩けないほど酒を飲んだ＝飲んだ酒の量が非常に多い
b．非対格自動詞
保育器が足りなくなるほど赤ちゃんが産まれた＝産まれた赤ちゃんの数が非常に多い
c．非能格自動詞
足にマメができるほど歩いた＝歩いた量（距離・時間）が非常に長い

（8）に挙げた各例の述語動詞「群がる」「つもる」「出来上がる」は非対格自動詞，（9）の述語動詞句「くれる」「喫む」「くれる」は他動詞であり，それぞれ主語または目的語の指示解釈となる。したがって，不定数量詞と項構造の関係性は「ほど」句とその意味解釈にもあてはまるこ

とがわかる。つまり，述語動詞句の項構造は，不定数量詞の指示解釈と同様，「ほど」句の意味解釈の一要因であり，「ほど」句は［「ほど」句＋非対格自動詞］のパターンでは主語指向タイプ，［「ほど」句＋他動詞］のパターンでは目的語指向タイプになる。ただし，これは基底的な傾向であり，実際には，次節に見るように，指示される名詞句の数性（単数／複数）も解釈の一要因となる。

4.3. 事物数量用法と名詞句の数性との関連性

鈴木(1997)は，影山(前掲)の分析を発展させ，同じ動詞でも名詞句の数性によって解釈が異なることを指摘した。

(33) a．日本人がたくさんハワイへ行った＝ハワイへ行った人がたくさん
　　b．私はたくさんハワイへ行った＝ハワイへ行った回数がたくさん
（鈴木1997:13(25)）

(33a) では，主語位置名詞句が「日本人」という複数解釈を許す名詞であるために，主語指向タイプの解釈になるが，(33b) の「私」は複数解釈を許さない。したがって，「主語の数量がたくさん」という解釈と衝突するために，「私がハワイへ行った」という事象の回数性を表わすことになるのである。これと同様の現象は「ほど」句の場合にもみられる。

(34) a．昨年，日本人が数え切れないほどフランスへ行った。
　　b．昨年，太郎が数え切れないほどフランスへ行った。

「数えきれないほど」は慣用的で，一律に数量解釈を要求する「ほど」句であるが，名詞句の数性によって，その指示対象は異なる。［±複数］の素性を持つ名詞句はそのまま事物数量用法としての解釈を許すが，［－複数］の名詞句の場合，事物数量用法の解釈は阻止され，多回的事象を表す事象回数用法と解釈されるのである。

このように，動詞の項構造と名詞句の数性に関する不定数量詞の解釈原理は，「ほど」句の解釈と用法にも適用される。これは「ほど」句が数量詞的性質に基づいて機能していることの証拠といえよう。

5．事象回数および動作量用法と数量詞の計量機能

事象回数用法は文が表す事象の回数を指示するという解釈，動作量用法は単位動作における動作量を指示するという解釈をうける。どちらも事象の計量（event quantification）に関わる数量概念を修飾するものである。そこで本節では，主に北原(1996)で提示された，個体数量詞・内容数量詞／頻度数量詞・期間数量詞という分類から，両者の計量機能と用法の対応を考察していく。

5.1. 個体数量詞・内容数量詞と頻度数量詞・期間数量詞――北原(1996)

北原(1996)は，数量詞の計量機能を①計量対象がモノか事象（＝事態，Event）か，②計量方法が個別的かひとまとまり的か，という観点から4つに分類した。次の（35）がその例である。

(35) a．みかんを40こ買った(北原1996：30(4a))
b．みかんを２kg買った(：30(4b))
c．太郎が次郎を5回殴った(：32(15))
d．太郎が花子と3時間会った(：35(33))

(35a) では数量詞「40こ」が修飾対象であるモノ「みかん」の構成要素を個別的に計量しているのに対して，(35b) では「２kg」はモノである「みかん」を総計的にひとまとまりとして計量している。両者はともにモノを計量対象としているが，その計量方法が異なる。そこで前者を「個体数量詞」，後者を「内容数量詞」と呼んだ。

一方，(35c) では数量詞「５回」は事象「太郎が次郎を殴った」の回数を計量しているのに対して，(35d) では同じく事象「太郎が花子に会った」を計量しているが，その回数は任意（1＜n）であり，n回の事象の量を総計的に時間で計量している。これらは計量対象が事象である点では共通しているが，計量方法が異なる。そして前者を「頻度数量詞」，後者を「期間数量詞」と呼んだ。

北原は計量対象としてのモノと事象との複数性を横断的なものと捉えた（「ホームランを40本／40回打った」)。並行的に，モノと事象の総計的な計量もまた横断的といえる。以上をまとめると，次のようになる[22]。

	個体数量詞	頻度数量詞	内容数量詞	期間数量詞
計量対象	モノ	事象	モノ	事象
計量方法	個別的計量		総計的(ひとまとまり)計量	

また，内容数量詞および期間数量詞は狭義の限界動詞句と共起しないとされているが(「*一時間殺した」(金水1995：180))，北原は次の（36）などは適格であるとして，その理由を次のように説明している。

(36) 兵士が１時間次々と市民を殺した(：37(41))
(前略)，動作主体や動作対象が複数存在するという読みを成立させる副詞句が存在する場合，期間数量詞は「殺す」と共起できるのである。(中略) Event が多回的であれば，期間数量詞が「殺す」と共起できるのである。(：37)

北原の議論を推し進めると次のように考えられる。限界動詞句は事象の終結点を含意するので，期間数量詞は共起できない。しかし，限界動詞句の表す事象が多回化されるならば，その終結点

も複数化し，非限界的な複数の事象の個別的構成要素として内包されることになる。これはモノをまるごと計量する内容数量詞とパラレルである。これにより，期間数量詞は限界動詞句と共起可能になるのである。さらにいえば，こうした多回的な限界的事象はその内包された個別的限界点から個別的に計量されることができ，同時に，総計的にも計量されることができる。限界的事象との共起において，頻度数量詞は多回的に解釈された事象の個別的計量であり，期間数量詞は事象の総計的計量であるといえる。

5.2. 連用的な「ほど」句の用法と計量機能

前節の議論をもとに，「ほど」句の事象回数用法および動作量用法の原理を考察してみたい。まず，このときの「ほど」句は限界的事象を表す動詞句と共起できない。換言すれば，「ほど」句が「割る」「壊す」といった限界動詞と共起するときには，目的語位置名詞句の複数性などから，多回的事象であると解釈されなければならない。多回化した限界的事象全体はもはや限界的事象ではない。そしてこのとき，「ほど」句は事象回数用法と解釈される。次の（37a）では，直接目的語が特定の名詞句「１個の花瓶」であるために，限界動詞句「花瓶を割る」で表される事象が多回的であるという解釈が許されない[23]。したがって，「ほど」句は共起できず，非文となる。一方，(37b）では直接目的語の数性は二義的であり，「ほど」句と共起することによって不特定多数の花瓶をひとつづつ割るという多回的事象の解釈になるのである[24]。

(37) a．*中川はヘトヘトになるほど１個の花瓶を割った。
　　b．　中川はヘトヘトになるほど花瓶を割った。

また，非能格自動詞による非限界的事象と共起したとき，「ほど」句は事象回数用法ではなく，動作量用法と解釈される。次の（38a,b）における事象は，それぞれ「二階堂が歩く」「清原が友達を待つ」であり，ともに非限界的事象である。したがって，多回的解釈の要求も受けず，個別的に計量されることもない。当該の事象における移動の距離や経過した時間といった計量系から表す動作量用法となるのである。

(38) a．二階堂は足にマメができるほど歩いた。
　　b．清原はタバコを二箱吸い終わるほど友達を待った。

こうした共起制限および意味解釈の分岐は，北原による数量詞の計量機能から説明することができる。つまり，事象回数用法は事象回数が多回的であることを含意するが，これは事象を計量する数量詞は一回の限界的事象を計量することができないためである。前述のように，限界的事象は，多回的解釈を受けたときには数量詞によって計量されうるが，それを個別的に計量するのが頻度数量詞であり，「ほど」句の事象回数用法であると考えられる。また，非限界的事象は内部に個別的構成要素を含まない（事象の限界点を持たない）ので，事象の個別的計量はそもそも不可

能である。したがって，「ほど」句は事象回数用法ではなく，単位動作内の動作量を計量する動作量用法と解釈されると考えられる。非限界的事象は非能格自動詞によって表されるが，このことは4.2節で観察した非能格自動詞と「ほど」句の指示対象の傾向とも一致する。

このように，事物を修飾対象としない「ほど」句のふたつの用法は一般数量詞の分析から得られた計量機能という観点から説明される。同様に，4.1節において形式名詞「ほど（の）」との並行性から説明された事物数量用法との関連も，各数量詞の計量対象の横断性から捉えられる。「ほど」句に数量詞的性質を認めることによって，程度述語と共起しない場合の「ほど」句の諸用法の原理が説明できるのである。

6．結論と今後の課題

本稿では連用修飾成分の「ほど」句の諸用法について，数量詞的性質から説明を試みた。考察の結果，得られた結論をまとめると次のようになる。

(39) 連用修飾成分「ほど」句には，程度用法だけではなく，事物数量用法（主語指向タイプ・目的語指向タイプ）・事象回数用法・動作量用法・様態用法といった諸用法が認められる。これら各用法は述語動詞句の概念的意味または修飾対象となる名詞句の数性などから，相互作用的な意味解釈の結果として導かれるものである。

(40) 数量概念に関わる解釈原理は一般数量詞の性質・機能から説明できる。

a．事象回数用法：事象回数を指示し，事象の回数が非常に多いことを表す。多回的に解釈された限界的事象の個別的計量。また，名詞句の数性によって，事物数量解釈が阻止されたときの二次的解釈。

b．事物数量用法：文中の名詞句の数量概念を指示し，その数量が非常に多いことを表す。主文が非対格自動詞述語文のときには主語位置名詞句の数量を指示し（主語指向タイプ），他動詞述語文のときには目的語位置名詞句の数量を指示する（目的語指向タイプ）。ただし，このときの指示名詞句は複数解釈を許すものに限る。

c．動作量用法：述語動詞句の表す単位動作の数量概念（時間・距離）を指示し，それが非常に長いことを表す。主文が非能格自動詞述語文で，非限界的事象を表すときに導出される。

「ほど」句の用法と性質については，詳細な考察はあまりなされてこなかったが，本稿で指摘したように興味深い考察対象であることがわかる。ただし，様態用法と動詞クラスとの関連性や補部の意味内容と解釈の関係など，解明すべき点は多く残されており，それらについては今後の課題としたい。

本稿において展開した議論は次の二点から，今後の連用修飾成分の研究に寄与する可能性があると思われる。ひとつは本稿で示唆した「述語動詞句の意味的性質との計算によって得られる連用修飾成分の解釈可能性」という問題である。本稿で考察した「ほど」句に関する現象はその端

的な例のひとつであり，他にも一般程度副詞の量的用法などもこうした接近法から考察することができるであろう。さらにはこれまで個別的に扱われてきた頻度・様態といった副詞もその射程に収めることができると考えられる。

注

1　丹羽(1992)は「ほど」を副助詞のひとつとして取り上げ，程度修飾用法ととりたて用法の関連性を考察している。その中で「ほど」の機能を計量関係と捉え，度合・頻度・数量に大別される用法を示しており，その観察は示唆に富むものである。また，「程度副詞が下位分類されるようにはっきり区別し難いところがある(：95)」という観察は，翻れば，「ほど」の用法の分岐はそれ自身よりもむしろ述語の意味的特性との関係性という視点から捉えられることを示唆しており，その点で丹羽の指摘は本稿の視点を補強するものであると考えられる。

2　「ほど」を形式副詞と捉える論考は他にも内田(1976)がある。内田は，山田(1908,1936)における形式性の議論を積極的に取り上げ，形式副詞を補部の句的意味を副詞句たらしめる副詞的関係形式の根幹をなすものとして評価した。また，形式副詞の機能と実質副詞の持つ関係性との連続性など，重要な示唆に富むものであるが，本稿では，奥津の論考を中心に議論を進めることにする。

3　本稿での「連用修飾成分」という術語は，主に北原(1973)に拠っている。

4　井本(1999a,b)では，「「ほど」節」と呼んだが，統語論的位置付けを考慮して「ほど」句と改めた。

5　考察当初は「補部が動詞句であるもの」としたが，北原博雄氏より否定辞「ない」を含めた規定について指摘を受けた。否定辞「ない」を含む補部の扱いは統語論的に慎重に検討する必要があるため，本稿では「節＋「ほど」」と規定するにとどめた。

6　形容詞述語文はその意味的性質から，ほとんどの場合は程度用法になる。もちろん「多い」「少ない」のような数量を表す形容詞の場合はそのかぎりではないが，いずれにせよ，当該の形容詞が含意する程度性に相関することになり，それは本稿の分析から敷衍されるものである。

7　「ほど」の用法のうち，単に述語の程度性を例示する用法（奥津の用語では「「通常」の程度」）は，「ほど」に相当し「非常の程度」用法のない漢字語「程度」との関係をより考察する必要があるため，本稿では扱わない。また，「ほど」と同様の用法を持つと考えられる「くらい」については，「非常の程度」用法に関しては「ほど」と同じとみて差し支えないと思われるが，「最低限の程度」を表す用法をどのように捉えるかは，現段階では結論できない。よって，これも「程度」との対応を含め，今後の課題としたい。

8　森山(1985)は程度動詞以外の動詞と共起する純粋程度副詞について「「よく」が挿入されるか（中略），具体的な形容語が入るかして，程度性のいわば受け皿が設定されるようである(：63)」と指摘している。これは非常に示唆的である。なぜならば，純粋程度副詞が直接的に程度動詞以外の動詞と共起することができないのに対して，「ほど」句の多くはそうした「受け皿」的な程度副詞を介することなく共起できるからである。換言すれば，「ほど」句は，程度概念の介在がなくても計算的に適切な解釈を導出することができるといえる。森山の議論については，2.1節で詳しく論じる。

9　ただし「たくさん」と「持ちきれないほど」の間には，ポーズがなければいけない。それは，ポーズを置かないとき，「たくさん」は補部内にあると捉えられ，「たくさん持ちきれないほど」という補部が非文になるためである。

10　このとき，指示される名詞句が「地震」や「学会」など，いわゆる事態（事柄）名詞の場合には事象回数用法的解釈が得られるが，それは名詞句の語彙的意味の問題であり，事物数量用法の決定的反例とはならない。なお，名詞句の事象性と数量性については5.1節を参照されたい。

11　様態副詞的用法が確認される動詞クラスには，他に身体関与動詞（「笑う」「泣く」など），運動様態動詞（「回る」「ジャンプする」など）がある。なお動詞クラスの名称はLevin(1993)の術語を参考にした。

12　「ほど」句の意味解釈と動詞クラスとの関連性については井本(1999 b)を参照されたい。

13　奥津は「食べれば食べるほど太る」のような事例を「「程度の形式副詞とは違う比例の形式副詞というべきかもしれない(：61)」」とし，必ずしも程度の形式副詞としてのみ機能すると断定しているわけではないが，本稿で示す各例はいずれも奥津が程度の形式副詞と捉えたものの範疇に含まれる。

14　(16) の例における「ほど」句は目的語よりも前に置いた方がより自然であろう（「隣の人が迷惑するほど新聞を広げている」）。ただし，これは森山の例文にもあてはまると思われる。「ほど」句の出現位置については，より長い要素が文の前に現れるという日本語の語順に関する原則が関係しているとも思われる。連用修飾成分と格成分の出現位置と階層性については矢澤(1992)など，副詞成分の階層性・語順に関しては仁田(1983)，野田(1984)などを参照されたい。

15　両者の挙げる副詞は同じではないので断定はできないが，森山と佐野が分類した各副詞群が概ね重なることは，「ほど」句と一般程度副詞に関する本稿の問題提起を補強するものと思われる。

16　副詞研究において，述語動詞との共起関係についての考察は森山，佐野の両論考以外にも新川(1979)などがあるが，その理論的体系化，精緻化は副詞研究の今後の課題となろう。

17　数量詞に後続する「ほど」については仁田(1981)なども参照されたい。そこでは［概括］の意義を持つ「ほど」の系列的意義について，「だけ」などとの比較から論じられている。

18　数量詞遊離については多くの論考がある（近年ではMiyagawa1989，高見1996，三原1998 a，Ishii 1999など）。Ishii の論考については注20も参照。

19　形式名詞「ほど」による間接的数量表現の遊離において興味深いのは，名詞句の形状等属性を表す「ほど」句は遊離できないということである。これは奥津(1983 b)が提示した「属性Q」に似ている。

（i）a．　2000ccの自動車を買った。

　　b．*自動車を2000cc買った。（奥津1983 b：15(39-1)）

（ii）a．　拳骨がすっぽり入るほどの湯呑茶碗を買った。

　　b．*湯呑茶碗を拳骨がすっぽり入るほど買った。

こうした「ほど」句をどのように位置付けるべきかは現時点では明らかではないが，数量詞のふるまいと並行的な現象として指摘しておきたい。

20　ただし，遊離数量詞とは違い，「ほど」句と「ほどの」とは厳密には同一であるとはいえない。最も大きな違いは，「ほど」句の用法には「当該の程度／数量概念が著しい／大量である」という読みが必ず含意されるという点で（井上優氏からも同様の指摘を受けた），それがないと文は不自然になる（「太郎の誕生パーティーには{会場に入りきらないほど／？*人影まばらなほど}客が来た」）。連体修飾構造である「ほどの」にはそうした含意は必須ではない。この問題についての明快な説明は現時点ではまだできないが，「ほど」句の出現位置に関係があるのではないかとも思われる。Ishii (1999) は，意味論的制約をもとに日本語の数量詞をNP-quantifier（連体的数量詞）とVP-quantifier（連用的数量詞）とに区別した。Ishii によれば先行詞直前に現れる数量詞は副詞的（adverbial）であ

る。仮に「ほど」句がVP-quantifierであると仮定すれば，その制約から「分配／累積読み（distributive/cumulative reading)」が要求されることになる。また矢澤(1985)における連用的数量詞による動作の達成量という観点や北原(1994)の議論も援用できるかもしれない。いずれにせよ，この問題については，今後の課題とし，慎重に検討を進めたい。

21　このとき「たくさん」と「ほど」句は数量詞的な位置付けを与えられることになるが，北原(1996)が指摘したように，計量方法が異なれば，複数の数量詞がひとつの先行詞を指示することが可能である。

（ｉ）橋げたが 18枚 約600m 横倒しになった(北原1996：30(6))

事物数量用法の「ほど」句と不定数量詞「たくさん」が，それぞれどのような計量方法をとるかについては定かではないが，一般程度副詞の出現位置に関する制約では説明ができない以上，当該の「ほど」句を数量詞的にふるまうと説明するほうがより妥当であると思われる。北原(1996)での議論については，５節で言及する。

22　この表は本稿筆者によるものである。また，以下の限界動詞句と期間数量詞との共起制限に関する本稿の議論は北原の意図したところとは必ずしも一致しないが，その敷衍として捉えられるものであると考えられる（北原氏からのご指摘による)。

23　事象のtelicityの決定には動詞の語彙的意味だけでなく名詞句の数性等も関与していることはJackendoff(1992)などでも指摘されている。日本語については北原(1999)などを参照されたい。

24　このとき，花瓶の数は，事象の回数と同期的に増える。また，(37a）において，「１個の花瓶を何度も割り，その結果，花瓶が粉々になった」という読みを得る話者もいるが，これは１個の花瓶を「複数の部分」へと拡張して得られる読みであると考えられる。これらは事象計量表現において非常に重要な視点であるが，本稿の議論を超えた問題であるので，これ以上は踏み込まないことにする。

参考文献

井本 亮（1999a)「「ほど」構文の意味解釈――数量詞の分析と事象構造の観点から――」神田外語大学修士論文

――――（1999b)「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について――述語動詞句の動詞分類を中心に――」『筑波日本語研究』第４号 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室 42-70

内田 賢徳（1976)「形式副詞――副助詞の形相――」『国語国文』44，44-57

奥津 敬一郎（1975)「程度の形式副詞」『都大論究』12，東京都立大学，86-97

――――――（1980)「「ホド」――程度の形式副詞」『日本語教育』41，149-168

――――――（1983a)「数量詞移動再論」『人文学報』160，東京都立大学人文学会，1-24

――――――（1983b)「続・形式副詞論――目的・理由の形式副詞――」『現代方言学の課題 社会的研究篇』平山輝男博士古稀記念会編，545-573

奥津 敬一郎・沼田 善子・杉本 武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

影山 太郎（1993)『文法と語形成』ひつじ書房

北原 博雄（1994)「数量詞の連用修飾機能――数量詞と先行詞の関係――」『文芸研究』第137号，1-10

――――――（1996)「連用用法における個体と内容数量詞」『国語学』186，29-42

――――――（1999)「日本語における動詞句の限界性の決定要因――対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論――」『ことばの核と周縁――日本語と英語の間――』黒田成幸・中村捷編，くろし

お出版，163-200
北原 保雄（1973）「補充成分と連用修飾成分――渡辺実氏の連用成分についての再検討――」『国語学』95集
金水 敏（1995）「いわゆる『進行態』について」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院，169-197
国立国語研究所（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
佐久間 鼎（1956）『現代日本語の表現と語法』厚生閣（1983年くろしお出版より復刻）
佐野 由紀子（1998）「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3，7-22
鈴木 和子（1997）「Event Structure から見た「たくさん」の解釈」神田外語大学修士論文
高見 健一（1996）「日本語の数量詞について――機能論的分析――（上―下）」『月刊言語』Vol.27. №1-3
田中 章夫（1977）「助詞（3）」『岩波講座日本語7文法Ⅱ』岩波書店
新川 忠（1979）「「副詞と動詞とのくみあわせ」試論」『言語の研究』むぎ書房，173-202
仁田 義雄（1981）「数量に関するとりたて表現をめぐって――系列と統合からの文法記述の試み――」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集刊行会編，191-214
――――（1983）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10，18-29
丹羽 哲也（1992）「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44号第13分冊，大阪市立大学，93-128
野田 尚史（1984）「副詞の語順」『日本語教育』52号，79-90
三原 健一（1998）「数量詞連結文と「結果」の含意（上―下）」『月刊言語』Vol.27. №6-8
森山 卓郎（1985）「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20，60-65
矢澤 真人（1985）「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子大学紀要』23
――――（1992）「格の階層と修飾の階層」『文藝・言語研究 言語篇』21巻，53-70
山田 孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
――――（1936）『日本語文法学概論』 宝文館
Ishii, Yasuo (1999) A Note on Floating Quantifiers in Japanese. *Linguistics: In Search of the Human Mind. —A Festschrift for Kazuko Inoue.* Ed. Masaaki Muraki and Enoch Iwamoto. Kaitakusya. 239-267
Jackendoff, Ray (1992) Parts and Boundaries. *Lexical & Conceptual Semantics.* Ed. Levin, Beth and Pinker, Steven. Blackwell. 9-45
Levin, Beth (1993) *English Verbs Classes and Alternations.* The University of Chicago Press.
Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese: Syntax and Semantics 22.* Academic Press.

用例出典

用例はすべて『CD-ROM版 新潮文庫100冊』（新潮社）から採った。以下に略号（五十音順）と収録作品名および著者名を記す。

（五十六）『山本五十六』阿川弘之，（陥落）『コンスタンティノープルの陥落』塩野七生，（錦繡）『錦繡』宮本輝，（黒い雨）『黒い雨』井伏鱒二，（孤高）『孤高の人』新田次郎，（さぶ）『さぶ』山本周五郎，（塩狩）『塩狩峠』三浦綾子，（砂の女）『砂の女』安部公房，（太郎）『太郎物語』曽野綾子，（点）『点

と線』松本清張，（二十四）『二十四の瞳』壷井栄，（華岡）『華岡青洲の妻』有吉佐和子，（ビルマ）『ビルマの竪琴』竹山道雄，（放浪記）『放浪記』林芙美子，（路傍）『路傍の石』山本有三

付　記

本稿は平成11年度国語学会春季大会（於：同志社大学）における研究発表をもとに加筆・修正したものである。研究発表の折には，井上優氏，奥津敬一郎氏，北原博雄氏，三宅知宏氏，村木新次郎氏の各氏から有益なコメントを頂戴した。また，査読して頂いた先生方のご教示によって，有益な修正を施すことができた。記して感謝申し上げます。

（投稿受理日：1999年10月25日）

井本　亮（いもと　りょう）

筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 言語学専攻 日本語学研究室

273-0031　千葉県船橋市西船2-20-4-303

FZX 04516 @ nifty.ne.jp

Japanese Linguistics 8 (October, 2000) 7-28 [Article]

On the use of the adverbial modifier '*hodo*'-phrase

IMOTO Ryo
Graduate student, University of Tsukuba

Keywords

'*hodo*', adverb of degree, numeral quantifier, telicity, computational interpretation

Abstract

Traditionally, the adverbial '*hodo*' has been viewed as an adverbializer which functions as the head of an adverb of degree phrase with a complement. However, in this paper I demonstrate that the adverbial '*hodo*' (-phrase) can also be interpreted as an adnominal quantifier, adverb of quantity of motion, or adverb of frequency, and conclude that the degree modifier usage is merely one of a multiple of usage of the '*hodo*'-phrase.

Based on a comparison of the behavior of '*hodo*'-phrase with other stereotypical adverbs of degree, I show that it deviates from stereotypical adverbs of degree both syntactic ally and semantic ally.

I assume that the '*hodo*'-phrase has numeral-quantifier-like properties because it can behave as a formal noun as well as the argument structure of its predicate verbs.

This assumption makes it possible to more adequately explain why '*hodo*'-phrase can have a multiple of readings. The 'adnominal quantifier usage' can be deduced from its function as an NP, when the antecedent NP (subject or direct object) required by the '*hodo*'-phrase is relevant to the argument structure of the matrix verb; the 'adverb of motion quantity usage' is related to its function as a VP quantifier that quantifies both the time and the path pertaining to an atelic motion; the 'adverb of frequency usage' can be derived from its function as an event quantifier for counting multiple events.

In this article, I conclude that the question of what the '*hodo*'-phrase modifies relates to its adverbial properties, the properties of the predicate, plurality of the referent noun, and event telicity. The approach used in this paper can be extended to the study of other adverbial modifiers.